様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　５月　５日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2007～2010
課題番号：19720069
研究課題名（和文）アメリカ中学高校教科書におけるマーク・トウェイン―その改変と自己検閲の系譜―

研究課題名（英文）Mark Twain in American Junior and Senior High-School Textbooks

研究代表者
石原　剛（ISHIHARA TSUYOSHI）
早稲田大学・教育・総合科学学術院・准教授
研究者番号：00368185

研究成果の概要（和文）：
1870 年代から 2000 年代におよぶアメリカの主に中学・高校教科書におけるマーク・トウェインの文学作品の使用状況の概要を分析した。特に、130 年余りにわたって非常に早い段階から繰り返しトウェイン作品がアメリカの様々な学校教科書で利用されていたことや、トウェイン作品が同時代の文学研究やトウェイン研究の潮流にしばしば影響される形で教科書に利用されていった点などが本研究により初めて明らかになった。

研究成果の概要（英文）：
This project analyzed the ways in which Mark Twain was used in American junior and senior high-school textbooks published from the 1870s to the 2000s. The study, for the first time in academia, revealed that Twain and his literature repeatedly appeared in various American school textbooks over 130 years and the use of Twain in textbooks was often influenced by the academic currents of the contemporary literary studies and Mark Twain scholarship.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	700,000	0	700,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
総　計	2,400,000	510,000	2,910,000

研究分野：アメリカ文学
科研費の分科・細目：　文学・英米・英語圏文学
キーワード：マーク・トウェイン、教科書、教育、文学、検閲

１．研究開始当初の背景

本研究課題開始当初において、研究代表者は日米の大衆文学や児童文学、および雑誌や映像などのメディアにおけるトウェイン像の変遷を検討した各種の論考を発表してきた。そこで、当初から、本研究課題「アメリカ中学高校教科書におけるマーク・トウェイン」を進める際にも、これまで手掛けてきた研究で得た成果を応用することで研究を進めることを計画した。特に、米国テキサス大学アメリカ研究科に受理された博士論文、および米国ミズーリ大学出版局より出版した拙著 *Mark Twain in Japan: The Reception of an American Icon*（2005 年）を完成する過程で培った資料収集のノウハウやトウェインに関する知見は、本研究を立ち上げる際の重要な基盤となった。加えて、上記の研究書に盛り込んだ「日本の国語教科書におけるトウェイン」に関する議論は、本研究課題に重要な比較文化的な視点を与えるきっかけとなった。

研究開始当初において、研究代表者がアメリカの教科書研究を手掛けた経験はなかった。しかし幸いにも、北米の中学・高校レベルの教科書研究に関しては既に優れた先行研究があり、そこで明らかにされた知見を本研究にも利用することができた。特に、宗教、人種問題、財界の意向、保守政権の台頭などの影響を学校教科書が直接、間接に受けてきた点を明らかにした Carl Grant、Gloria Grant の論文や、Dian Ravitch の教科書研究、さらに、公民権運動と学校教科書における少数派の表象を関連付けた Arthur Woodward、David L. Elliott、Caroline Cody、Ian Westbury などの研究は有用で、教科書作成におけるポリティックスの重要性を本研究開始時点で認識するという意味において極めて重要であった。また、これらの先行研究が明らかにしたような、いわば周囲の社会的、政治的環境の変化に影響を受けやすいアメリカの学校教科書の特徴が、本研究課題のテーマでもある「教科書におけるトウェイン作品の自己検閲や改変」の前提になった。

以上のような重要な先行研究は存在したが、本研究課題が主題とした作家マーク・トウェインに特化した教科書研究に関しては、研究開始当初（および 2011 年 5 月現在においても）、本研究以外には存在しなかったため、多くの場合、独自の視点や枠組みを基盤として研究を組み立てていった。

２．研究の目的

本研究の目的は、政治や社会状況に影響を受けやすいアメリカの中学・高校教科書の特徴を念頭において、中学・高校の文学教科書におけるトウェイン作品の使用状況を時代順に明らかにしていくことである。具体的には、主として以下の３点を明らかにすることを目的とした。（１）それぞれの時代において、いずれのトウェイン作品が教科書に頻繁に掲載されたのか明らかにし、作品の使用方法と掲載理由を同時代のアメリカの政治、社会、教育、文化の状況を踏まえながら検討する。同時に、頻繁に掲載された作品に注目するとともに、当時高い評価を受けながらも掲載されることの少なかったトウェイン作品についても目を配り、その原因についても出来うる限り明らかにする。（２）同時代のアメリカにおけるトウェイン評価との関連性を明らかにする。特に、1930 年代における Bernard DeVoto によるトウェインの西部的土着性への高い評価、また 1940 年代における Lionel Trilling を中心とした学界における『ハックルベリー・フィンの冒険』の正典化、また、1950 年代から 60 年代に至る、Henry Nash Smith や Leo Marx といったアメリカ研究の専門家によるアメリカの象徴としてのトウェイン文学への高い関心、また、80 年代以降の『ハック・フィン』における差別語への批判の高まりと、90 年代以降の Shelley Fisher Fishkin を中心とした Multiculturalism の立場からのトウェイン文学の再評価などが、教科書におけるトウェイン作品の使用状況に如何なる影響を与えているのか検討する。（３）トウェインの原作と教科書に掲載されたトウェイン作品を丁寧に比較検討することで、教科書版トウェイン作品における自己検閲や改変の様相を明らかにする。特に、『ハック・フィン』で頻繁に使用されている差別語 “nigger”や同作品における黒人奴隷ジムの描き方に対する教育現場での厳しい批判を踏まえ、差別語や黒人の描写の改変に注目していく。その際、20 世紀前半の教科書も検討していくことで、このような改変がいつ頃どのような形で始まったのか詳らかにするとともに、20 世紀後半の教科書における『ハック・フィン』の差別語の問題も検討する。

これら３つの論点は個々に独立するわけではなく相互に関連し合っており、本研究では、それぞれの論点を分断することなく、有機的に結びつけて考察する。

３．研究の方法

本研究課題は 130 年以上におよぶ大量の教科書や教師用指導書などの教科書関連資料を必要とするため、それら膨大な一次資料をいかなる方法で効率的に収集するかが極めて重要となった。特にアメリカの中学・高校教科書や指導書は、地域の公立図書館などに散在していることが多く、20 世紀初頭から現在に至る全ての中学・高校教科書に目を通すことは不可能であったため、1910 年代、20 年代、30 年代というように、およそ 10 年ごとに時代を区切って、比較的に入手しやすい大手教科書出版会社の代表的な中学高校レベルの文学教科書を中心にトウェイン作品の使用状況を調査した。

資料収集の最大の拠点としては、アメリカ最大の図書館である米国議会図書館が挙げられる。大学の夏期・春期休業期間を利用して、同図書館があるワシントン市に数度に分けてそれぞれ１～２週間ほど滞在し、教科書資料の収集を集中的に実施した。

米国議会図書館で入手できない教科書資料に関しては、アメリカの大学図書館と提携関係にある早稲田大学図書館の「図書館間貸し出し制度」（ILL）を何度か利用した。ただし、海外図書館への貸し出しは制限がある上、貴重な教科書の場合、ILL 制度を利用できないことも多く、同制度を利用した資料の入手は極めて限定的であった。

また、当初、アメリカ最大の教科書関係のコレクションを有すると思われる Center for Research Libraries（シカゴ市）も利用する予定であったが、同図書館はオンライン・カタ

ログなどで所蔵する教科書関連資料の書誌情報を検索できないため、事前にどのような資料を保持しているかまったく確認できないことに加え、提携研究機関以外の研究者に対しては、一度の資料請求で非常に高額な手数料を課すという各種の障害があり、利用を断念せざるを得なかった。

その一方で、本研究課題の最終年度となる2010年度に、スタンフォード大学教育図書館の有力な教科書コレクションが開架式という利用者に広く開かれた体制を有していることを知り、2011年3月に集中的に資料収集を実施した。その結果、極めて貴重な教科書類や教師用指導書を効率的に入手することができた。

４．研究成果

米国議会図書館、ユタ州立大学図書館、およびスタンフォード大学教育図書館教科書コレクションでの現地調査の結果、2000年代にいたる約130年間に及ぶアメリカの主要中学・高校教科書のうち、マーク・トウェインへの言及がある324点（2011年5月1日時点）教科書および教師用指導書を発見し、主に複写資料の収集を行った。

この調査によって、1873年に出版された読解教科書（Reader）において初めてトウェイン作品（掲載作品はヨーロッパ旅行記 *The Innocents Abroad* からの抜粋）が取り上げられていたことが判明し、『トム・ソーヤ』や『ハック・フィン』、『王子と乞食』といった主要長編小説を発表する以前の極めて早い段階において既にアメリカの教育現場にトウェイン文学が利用されていたことが明らかになった。

さらに、今回の調査により、20世紀前半に至るまでは、小説より、むしろ西部旅行記やスピーチといったスケッチ風の初期作品の方が頻繁に教科書に登場していることも明らかになった。20世紀後半においては、比較的低学年向けには『トム・ソーヤ』、高学年になると『ハック・フィン』などの主要小説作品が頻繁に文学教材として利用されたが、より長い時間的枠組みで考えた際、教育現場におけるトウェイン評価が、必ずしも今日評価される「小説」に常に立脚するものではなかったことが明確になった。同時にこのことから、トウェイン文学に対する理解や評価の時代的変遷をも垣間見ることができた。

加えて、20世紀前半までの中高のアメリカ文学教科書では、アメリカに多数生息する動物関連の描写や、極西部やミシシッピー川を舞台とした体験談など、アメリカ性を如実に想起させる作品が重点的に紹介されていたことが判明した。さらに、ユーモアの単元でトウェイン作品の掲載や彼の文学への言及がなされることも多く、全体的にアメリカ性や明るい笑いの要素を感じさせる作品が掲載される傾向のあることが明らかになった。しかしその一方で、トウェインの真剣な社会批判やペシミズムへの言及がなされることは極めてまれであった。このことから、教科書に早い段階で登場しながらも、明暗両面に及ぶトウェイン文学の幅広い側面への理解や関心が、20世紀前半までの中等教育の教科書、ないしはそれを使用する中学高校の教育現場において、必ずしも広く浸透していなかったことが明らかになった。

特に、アメリカにおける19世紀最大のベストセラー教科書『マガフィー読本』においてトウェインが徹底して軽視されていた事実を発見したことは注目に値する。現時点の調査で判明している限り、同シリーズにおいてトウェイン作品が掲載された例は、わずか1回、高校生用の『マガフィー読本』（1889年）が掲載した初期旅行記の抜粋のみであった。一方で、トウェインの最高傑作と多くが認める『ハック・フィン』に対しては意外にも最低の評価を下していたことも明らかになった。これまでにも、『ハック・フィン』評価の浮沈は多くの研究者に指摘されてきたが、19世紀の教科書を代表する『マガフィー読本』による同作品への批判は、その後20世紀後半に再燃する教育現場における主に人種の視点からの『ハック・フィン』批判をより相対的視点から捉える意味で極めて示唆的であるといえる。それと同時に、『ハック・フィン』が出版当初、保守系の団体や評者から攻撃を受けた事実に鑑みれば、『マガフィー読本』による同作品への否定は、何よりも同教科書シリーズ自体の保守性を如実に物語っていると指摘できよう。

これらの研究成果の一部は、2008年3月に出版した単著『マーク・トウェインと日本』第7章の日米教科書におけるトウェインの利用状況の比較論に反映することができた。また、これらの研究成果を同時代アメリカのトウェイン観や文学観と有機的に関連付けて分析した内容については、2009年8月にアメリカ、ニューヨーク州で開催された国際マーク・トウェイン学会、および同年9月に実施された日本児童文学会例会で発表する機会をもった。幸いにも参加者の高い関心を得ることができ、同発表の成果をさらに発展させた内容を英語論文としてまとめ、同論文は2010年3月に審査付の学術雑誌に掲載された。

本研究課題の最終年度である2010年度は、研究対象であるマーク・トウェインの没後100周年と重なったこともあり、研究内容について内外の研究者と交流する機会を多くもつことができた。特に、2010年10月に開催された日本アメリカ文学会全国大会でのシンポジウムでは、アメリカ文学の研究や教

育における最も重要なテクストである４つの主要アメリカ文学史におけるトウェイン紹介に関する研究成果を発表する機会をもった。研究対象として、北米で出版された1910 年代から 2000 年代のおよそ 100 年近くに及ぶ主要文学史を設定したが、研究の結果、トウェインに関する記述が、西部性の愛国的言説の強調から次第に多文化主義的言説にとって代わられる状況を明らかにすることができた。特に、文学史編集者や執筆者の学問的スタンスや、第二次大戦などの編集を取り巻く愛国的社会状況、80 年代以降の多文化主義によるマイノリティ重視の学問的潮流など、同時代の様々な影響の跡をみることで、文化的・社会的解釈を踏まえたより深い考察になるように留意した。尚、同シンポジウムでの成果は、2011 年４月（実際の刊行は５月）に発行される日本マーク・トウェイン協会の機関誌に発表されることが決定している。

また、トウェイン没後 100 周年を記念して出版された日本初のトウェイン事典（『マーク・トウェイン文学・文化事典』）の編集委員・執筆者として研究の成果を一般読者にも理解しやすい形で紹介する機会をもった。同事典では、主にトウェインと日本関連の記述を担当したが、トウェインの没後年表の作成においては、本研究を進める過程で発見した内容の一部を盛り込むことができた。

以上の研究成果から明らかなように、全体としては、アメリカの同時代の学界の流れや、社会的動きと関連付ける形で教科書におけるトウェインの姿を跡付けるという当初の目的に関しては、その多くを実現することができた。

ただし、いくつかの積み残した課題もある。特に、予想に反して、比較的現代に近い時期に出版された教科書関連資料の収集が困難を極めた。特に、比較的古い教科書関連資料については、貴重図書としてスタンフォード大学の教科書コレクションや米国議会図書館が集中的に所蔵していることが多い一方、1970 年代以降の教科書については、教科書が改訂されるごとに図書館が所蔵している旧版の廃棄を行うことが多く、大規模図書館や大学図書館のコレクションが所蔵していないケースも多々見られた。全米各地に散在する小規模の公立図書館が所有する資料もあったが、時間的制約から 1970 年代以降の教科書に関しては、網羅的な資料収集を実現することが出来なかった。その結果、戦後の政治社会の動きと学校教科書におけるトウェイン使用の関連性を詳細にわたって十分に調査することは出来なかった。特に、1960 年代から 70 年代にかけての公民権運動の動きや、1980 年代以降の多文化主義の動きと連動して、トウェイン作品における少数派の表象の扱いがいかに変わったか、といった問題については、より確実な議論をするためにさらなる資料の収集をまたなくてはならない。

ただし、全体として、本研究課題に関しては、トウェイン研究の権威でもあるスタンフォード大学教授の Shelley Fisher Fishkin 教授やセイント・ルイス大学の Harold K. Bush 教授など、最先端のトウェイン研究を手がけているアメリカの研究者たちが本研究の独自性と重要性を認識し、高い関心を払っている。研究代表者自身も、本研究のさらなる発展とその重要性は十分認識しており、今後もさらに粘り強く同研究に取り組むことで、最終的には本研究課題を正面に据えた研究書の出版を目指していくつもりである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
（１）石原剛「マーク・トウェインの文学『史』的遺産―4 つの文学史を辿りつつ」『マーク・トウェイン―研究と批評』10 号、2011 年 4 月、46－53 頁。（査読なし）
（２）Tsuyoshi Ishihara, “Mark Twain in American School Textbooks, 1875-1910” 『早稲田教育評論』24 巻 1 号、2010 年 3 月、79－92 頁。（査読あり）

〔学会発表〕（計３件）
（１）石原剛「マーク・トウェインの文学的遺産」、第 49 回日本アメリカ文学会全国大会シンポジウム、2010 年 10 月 10 日、東京
（２）石原剛「アメリカ学校教科書におけるマーク・トウェイン―19 世紀後半を中心に」、日本児童文学学会例会、2009 年 9 月 12 日、東京
（３）Tsuyoshi Ishihara, “Mark Twain in American School Textbooks, 1875-1910” The 6th International Conference on The State of Mark Twain Studies（第 6 回国際マーク・トウェイン学界）、2009 年 8 月 7 日、ニューヨーク州、エルマイラ市

〔図書〕（計２件）
（１）石原剛他編『マーク・トウェイン文学・文化事典』彩流社、2010 年、482 頁。
（２）石原剛『マーク・トウェインと日本』彩流社、2008 年、366 頁。

６．研究組織
(1)研究代表者
石原　剛（ISHIHARA TSUYOSHI）
早稲田大学・教育・総合科学学術院・准教授
研究者番号：00368185